

若い力と市民団体の連携を考える シンポジウム報告書

平成
29年度

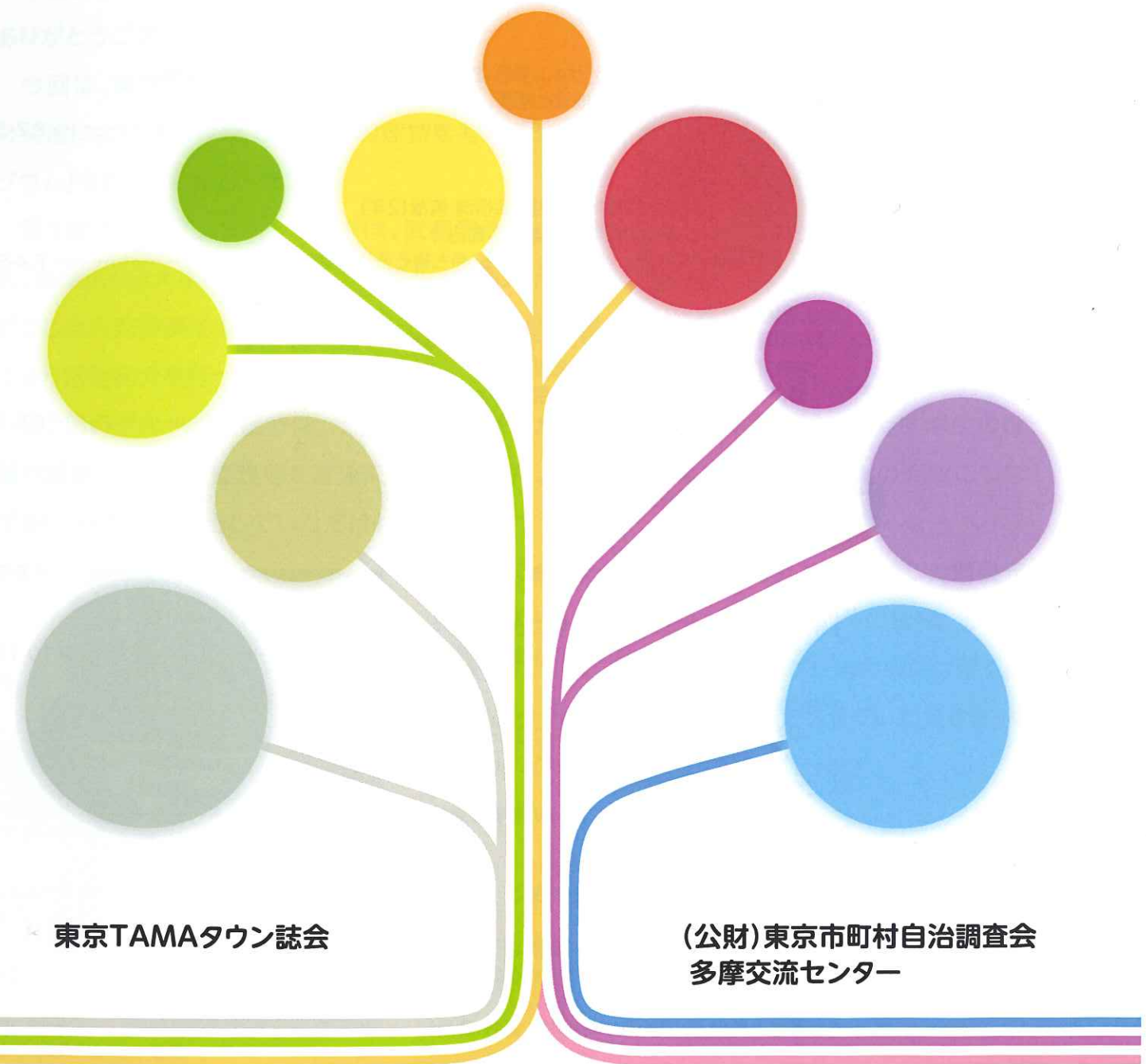
地域と共に学生に成長の場を

若い力と市民団体の連携を考えるシンポジウム報告書

(公財)東京市町村自治調査会
多摩交流センター
東京TAMAタウン誌会

東京TAMAタウン誌会

(公財)東京市町村自治調査会
多摩交流センター



目次

若い力と市民団体の連携を考えるシンポジウム 地域と共に学生に成長の場を

共 催：(公財)東京市町村自治調査会多摩交流センター・東京TAMAタウン誌会
開催日時：2017年11月26日(日)・午後1時～5時
会 場：多摩交流センター

開催挨拶：松村 仁文(公益財団法人 東京市町村自治調査会 多摩交流センター所長) P.1

第1部 講演

1. 武蔵野美術大学
講演：齋藤 啓子(視覚伝達デザイン学科:教授)&松本 昌(大学院建築コース2年)
・専門性を活かした他大学、地域と連携
・学びを地域へ P.2-3
2. 多摩大学
講演：梅澤 佳子(経営情報学部:教授)&横溝 侑哉(2年)
・実学の多摩大 学生の産学公民連携活動紹介
・みんなの食卓プロジェクト・お米(気持ち)持ち寄る多世代交流 P.4-5
3. 明星大学
講演：西田 剛(ボランティアセンター担当課長)&松崎 千里(1年)
・学生ボランティアセンターの役割
・僅かな時間でも学生にとっては宝物となりうる時間
・松崎 千里さんの体験 P.6-7

第2部 グループワークの報告

- 総括 ・学生、先生、市民—参加者が熱い議論を展開 P.8-9
1. Aグループ・小林 紀之(小平社協こだいらボランティアセンター)
・大学と地域とのつながりを作る共通点は何か? P.10-11
 2. Bグループ・奥野 英城(悠学の会)
・学生と地域団体がともにプラスになる連携作りを P.12-13
 3. Cグループ・横溝 侑哉(多摩大学)
・地域のボランティア活動に、多くの若者に参加してもらうには? P.14-15
 4. Dグループ・松崎 千里(明星大学)
・ボランティア活動のメリットを明確に P.16-17
- まとめ：シンポジウムの成果報告・齋藤 啓子(武蔵野美術大学)
・市民と大学生が対等な関係で交わるために P.18-19
- あとがき：柴崎 斉(東京TAMAタウン誌会 会長) P.20

交流事業「シンポジウム・交流会」開催挨拶

ご紹介いただきました、公益財団法人東京市町村自治調査会多摩交流センター所長の松村と申します。開会にあたりまして、ひと言、ご挨拶申し上げます。

本日は、お忙しい中、当企画にご参加いただきましてありがとうございます。

今回は、東京TAMAタウン誌会と多摩交流センターの共催により「若い力と市民団体の連携を考えるシンポジウム」を行うことになりました。

第1部のプレゼンテーションでは、武蔵野美大、明星大、多摩大の3大学の皆さんにより「学生が、地域活動にどうしたら充実感をもてるか」というテーマで事例発表により活動紹介を行っていただきます。

第2部のグループ討議では、ご参加の皆様がグループに分かれ、地域活動に果たす学生の役割や課題、今後の可能性等を意見交換していただき、皆様の地域活動や市民活動の充実につなげるヒントを見つけ出していただければと思います。

最後になりますが、本日ご参加いただきました齋藤先生、梅澤先生、西田様をはじめ発表団体の皆様、そして共催者であります東京TAMAタウン誌会様には厚く御礼申し上げます、開会のご挨拶とさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。



松村 仁文 公益財団法人 東京市町村自治調査会 多摩交流センター所長



シンポジウム開催風景

武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科の齋藤啓子教授は「地域社会につながるデザイン」と題して、「つながる、つなげる」をキーワードに行政や地域団体・NPOなどとの連携事業について説明。また、商店街との課題解決型プロジェクトでは、ノーマライゼーション(*)という同じテーマで集団をつなげる事業(障がい者作品展、異才たちのアート展、みんなでつくる音楽祭)を行うなど地域社会のさまざまなシーンで同大学生たちは市民とともに活動していることなどを伝えた。

大学院建築コース2年の松本昌さんは、川のない小平で玉川上水から分水された小川用水ができたことで、荒地に人が住むようになった歴史が、地域で希薄になっていることを知った。もっと地域の人たちに知ってもらいたいと、研究室の学生が中心となって立ち上げた「小平市小川用水応援団」について説明。現在同応援団代表として、地域の市民や子どもたちと関わり、散歩会などを実施していることを説明した。

活動は本年度小平市市民活動支援公募事業にもなり、同市都市計画課主催の「景観まちづくりセミナー」に参加し、ワークショップで美大生ならではの模型キットなどを活用したことなどを話し、小平市で学ぶ美大生だからこそその機動力、独創性などを伝えた。(*)ノーマライゼーションとは、高齢者も障がい者も健常者と同様の生活ができるように支援するという考え方。



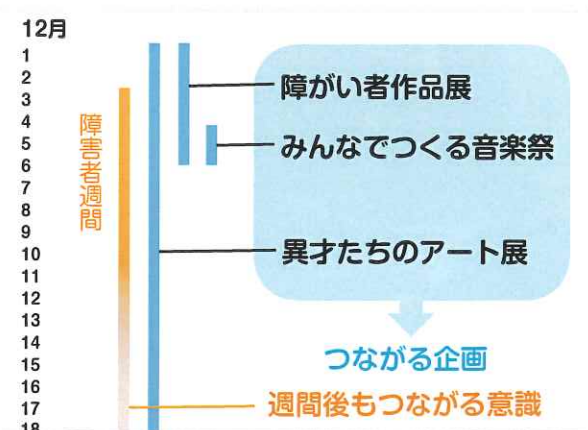
発表する齋藤啓子教授

専門性を活かした他大学、地域と連携

同大のある小平市には、専門性を持ったいくつもの大学があり、各大学が専門性を活かした地域活動が展開されている。2005年からは市内の6つの大学有志が参加して市内NPO団体、市役所と共に活動するようになった。

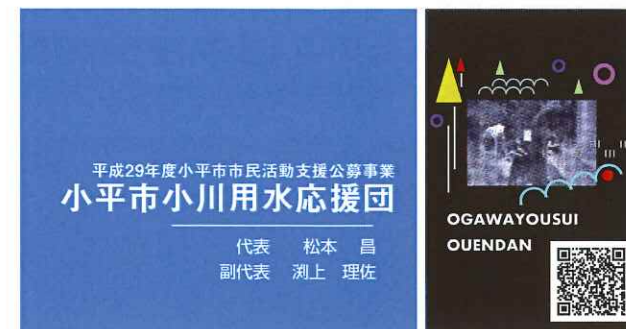


美術大学としてのデザイン力、企画力を発揮。青少年育成や商店街における障がい者にとってうれしい空間づくり、彼らの地域参加に大きく貢献している。



授業の中には地域でのフィールドワークが盛り込まれる科目もあり、大学から地域へ積極的に出ていく課題解決型の仕組みがある。数年にわたって継続する活動事例も多く、市から共同・受託研究も受けているという。

学びを地域へ



なぜ小川用水なのか

小平市には農地とそれにまつわる緑地・水などの歴史的文化的資産が今も残されている。その中でも小川用水は小平に人が住むための礎となった大切な資産である。

荒地であった武蔵野台地のこの地には、その人が生活するために必要であった「水」がなかった。

それを解決するために小川九郎兵衛氏は用水を現在の小平の地に引き、人が住めるよう開発に尽力したというドラマティックな歴史がある。

そんな歴史を学ぶ都市であるこの小平に遠くから学生や地域に住む若い世代の関心は高まっている。アートイベント、展覧会やワークショップなどワークショップを通じて、地域の子供、若者の方々に歴史と文化を伝える活動に、さらに参加、普及できると考える。



小平市発展の源となった「小川用水」についての研究を通して、玉川上水からの水の大切さを市民へ伝える活動を紹介。「みどりの大切さ」を美大生ならではの技法を活かして市民の理解に役立てた活動を紹介。



発表する大学院2年 松本昌さん



実際に散策マップを作り、体感するワークショップ「小川用水散歩会」。市民の関心の薄さ、貴重な文化的な遺産の埋没などを歩きながら実感する機会を提供したという。



同市の補助金を受けた「景観まちづくりセミナー」を企画。まちづくり条例をいかに活用するべきか?地域の将来像を参加者と共に市民主導で設計する試み。参加者各自が作った模型を組み合わせることで小平市の将来のイメージを完成させた。建築学科の学生10人が2カ月をかけて準備したという。



多摩大学からは経営情報学部の梅澤佳子教授と、梅澤ゼミ2年の横溝侑哉さんが参加。「多摩大学経営情報学部における活動内容の紹介と事例発表」として、先ず梅澤教授から「実学」志向の教育を展開する組織の説明と学生の産学公民連携による活動が紹介された。

また、同ゼミの「みんなの食卓」プロジェクトや「近隣交流七輪」プロジェクトなどを通じ多世代交流の仕組みづくりをしていることや、「大学の非公認マスコットキャラクターを作りたい」プロジェクトではデザインの募集、コンペで学生・生徒を巻き込み、着ぐるみまで達成したことなどが伝えられた。

梅澤教授は「学生は実習やインターンシップで多忙」などと説明し、「学費や生活費、就活資金のためにアルバイトを行う学生も多く、ボランティア活動の意志があっても活動する余裕がない。

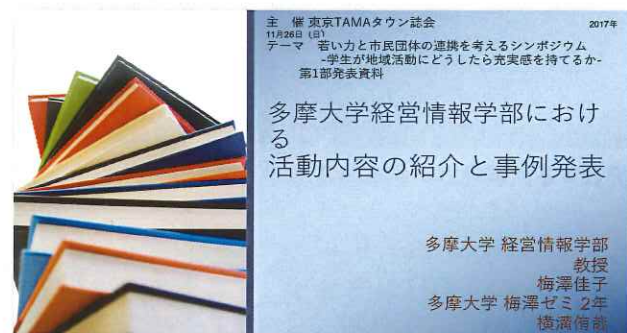
今後は有償ボランティアなども視野に入れ、せめて交通費程度の経済的支援が必要」と学生側の視点から言及した。



発表する梅澤佳子教授

地域活性化マネジメントセンター、アクティブ・ラーニングセンターを中心とした産学公民連携による実学教育とゼミ活動

経営情報学部(多摩市)は4学年合わせても1600人弱。コンパクトなキャンパスで学生・教職員の距離が近いのが利点である。「実学に学べ」「現場を見て動け」の精神が教職員間で共有され学生を地域へ送り出す機運に満ちているようだ。1年次のプレゼミ、2年次からホームゼミで、学生は調査、企画から始め、時には資金調達まで行って地域と関わっている。4年間のゼミ活動で完成度の高い、継続性のある地域との関わりも生まれるという。



梅澤ゼミ「みんなの食卓」プロジェクト お米(気持ち)持ち寄る多世代交流

みんなの食卓PJ

多摩大学経営情報学部
梅澤ホームゼミナール2年
横溝侑哉

プロジェクトの目的

- 「食」を通して高齢者と地域の子どもたちとの世代間交流を図りたい。
- 高齢者にとっては交流・情報共有の場、子どもたちにとっては高齢者との交流と多世代での食事の楽しさを感じる場を提供したい。⇒子どもたちの自発的コミュニケーション能力の向上
- 共に食事することで「共食」ができ、高齢者と子どもたちの「孤食化」を防ぎたい。

実際に活動を続けると、
高齢者と子どもだけでなく、子どもたちの保護者や大学生など
多世代の交流が自然にできていることに気づいた。

みんなでおいにぎりを作り味わう。孤食になりがちの子どもと高齢者、わいわいと食卓を囲むプロジェクトは4年間で17回継続している。秋は子どもたちが育てた新米を味わう。

これまでの活動実績...4年間で17回開催

2014年	2016年
第1回 10月12日	第9回 5月29日
第2回 12月7日	第10回 7月24日
第3回 2月18日	第11回 9月25日
	第12回 11月27日
2015年	2017年
第4回 5月17日	第13回 3月5日
第5回 7月5日	第14回 5月7日
第6回 9月13日	第15回 7月9日
第7回 12月6日	第16回 9月10日
第8回 2月14日	第17回 11月12日



リーダーが動かすのではなく、みんながプロジェクトを動かす。「将来は地域の豊かな生活者になってほしい」という梅澤教授の思いが込められた地域との多世代間の連携活動。

発表する
2年の横溝侑哉さん

明星大学からは同大ボランティアセンター担当課長の西田剛さんと、教育学部教育学科1年生の松崎千里さんが参加した。同大では、学生支援組織の1つとしてこのセンターが9年前に設立された。学生ボランティアの拠点として、ボランティア(以下ボラ)の紹介や相談、研修会やセミナーなどを行い、ボラの意識を高めたり活動の活性化を図っている。

大学近隣で高齢者が定期的に集まる会に学生が参加して、音楽や落語など一芸で場を楽しませる活動を紹介。授業の空き時間を使ってできるため、学生は参加しやすく、高齢者は若い世代と交流ができるという双方に効果がある関係になっていると説明があった。

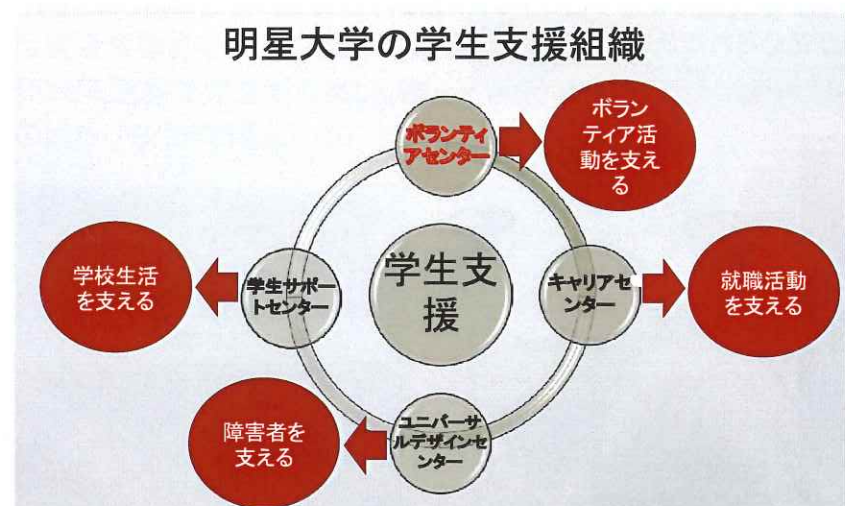
松崎さんからは、ボラに関わるようになったきっかけや自身の活動を紹介後、「活動でさまざまな人と出会えたことが自身の幅を広げてくれた」と笑顔で伝えた。



発表する西田 剛さん(ボランティアセンター担当課長)

学生ボランティアセンターの役割

ボランティア専門サークル16団体と個人ボランティアに対して、紹介、保険加入、資格取得支援、交通費や備品補助認定などを行うと共に、災害復興など長期ボランティアの企画を実施。年に数度の振り返りを通して地域にも情報を発信している。僅かな時間でもボランティアができる機会を作るなど近隣との連携はさかん。



1年生・松崎さんの体験



発表する1年の松崎千里さん

2017年夏、松崎さんは福島県いわき市、熊本県の震災復興ボランティアを体験。「前向きな被災者の思いに触れた。自分の学業の目標が生まれた」と体験を披露。

今まで活動したボランティア

- ★災害復興
- ★学習支援(移動教室引率など)
- ★近隣小学校に朝読書
- ★発達障害を持つ子どものサッカー教室
- ★児童相談所メンタルフレンズ
- ★着ぐるみ

など...

私の考えるボランティアの魅力

- ★「出会い」
- その時、その場所で出会えた方々との交流や、出会えたことで受けた刺激。

全てが今の私、これからの私へとつながると思う。だから楽しい!!
様々な「出会い」が私を変えてくれる!



僅かな時間でも 学生にとっては 宝物となりうる時間

西田さんは「学生は学問が優先となる。ボラができる期間は2.5年ほど。大学と地域が連帯して若者を育てることが大切なのでは」と訴えた。

地域ボランティア活動(成功事例)

若い人が参加してくれる→楽しみ
会の参加者に変化!(おじいちゃん増えた)

学生 多世代交流ができる→学び
コミュニケーション能力向上に繋がるかも?

双方に効果 WIN WIN の関係

学生、先生、市民—参加者が熱い議論を展開

— 後半の部、齋藤先生が絶妙なリード —

後半の部では、地域社会と深いつながりをお持ちの、武蔵野美術大学齋藤啓子先生にコーディネートをお願いしました。A～Dの4グループに分かれ、最初に、2人1組で打ち解けるようにと、お互いの共通点を出し合いました。朝食はパン、服は黒系が好き、コーヒーはグアテマラといった嗜好の話

題から、地域に関心がある、家族に障害者がいる、リタイアして何か社会に貢献したいといった共通点が見つかりました。本題では次の3つのステップに分けて話し合われました。参加者の声をそれぞれいくつか紹介します。(ステップ1, 2は、内容に共通点があるので、まとめました)

総括

Step 1 大学に知っている先生がいますか？
どのようにして知り合いましたか？

Step 2 大学と地域団体はどのようにして
繋がりましたか？

- 先生が、障がい者支援、調査研究などで地域の団体とつながりがある。
- ワークショップ、イベント、共通のテーマ、研究等を通して。
- 先生が公開講座の講師を務めたり、その場に学生、市民が同時に受講した。
- それぞれのボランティアセンターを通じて。
- 学生と地域は大学を挟まないとなかなか機能しない。
- 街づくりには、市民、大学、行政の連携が必要。
- 大学は学生をフィールドで市民と交流させたい。
- 地域での、大学、市民団体との共通した興味の発見が必要。
- 学生が留学生の場合、連携がうまくいく例は多い。

Step 2

Step 3

Step 3 若い力の魅力は？ その繋がりの中で、若い力をどう活かすか？

- 学生に興味があるテーマか、役に立つかなど学生にやる気を出させることが大切。
- 大人は「してあげる」ではなく、「一緒に作っていく」という感覚がよい。
- 活動の趣旨、意義を学生に正しく伝える。
- 活動を授業に取り入れ、単位として認定する。
- 有償ボランティアについても考える必要がある。
- 学生ボランティアセンターに多数の情報が集まると学生の活動範囲が広がる。
- 子どもにとって、学生はお兄ちゃん、お姉ちゃんに映り、親しみやすい。
- 一方的な関係だと繋がり断絶につながる。
- セクハラ、パワハラにならないように注意するなど、学生へ配慮する。
- 若い人の希望、やりたいことを尊重してほしい。
- 学生が、また来ようという気持ちになるように熟慮する。
- 大学、学生、市民の信頼関係を築くことが大切。

大学と地域団体とのつながりを作る 共通点は何か？

Group A

小平市社会福祉協議会
こだいらボランティアセンター
小林 紀之(20代)

地域で、大学・学生と市民団体とのつながりがあるかという質問では、「ある」と答えたのは6名中5名で、市民団体、学生ともに1, 2件の関わりがありました。一方で、大学や中間支援組織の職員は職務上の関わりから、多くのつながりを持つ傾向が確認されました。

大学・学生、団体がつながった経緯として、ボランティア団体では、①大学窓口に協力者を募る相談したところ、教授が学生の社会勉強の場を求めているため、②興味のある公開講座への参加、という2点のきっかけが紹介されました。一方、学生ではシンポジウムに参加したのが、団体と知り合ったきっかけになったようです。教授は、御用聞きとして地域を回ること、地域団体とのつながりを得たとのことでした。また、大学が地域団体と学生をつなげる可否の判断をどのようにしているかという質問では、やり方は場所ごとに異なるが、聞き取りや見学を通して、双方の相性を見て判断しているとのことでした。

最後に、「若い力とどのようにつながったか、若さの持つ強みはなにか」というテーマについて話し合いました。地域団体が、学生と関わるきっかけを見つけること自体が難しく、大学がより関わることで学生の不安を解消し、参加につながれるのではないかと意見が出ました。一方で、学生と団体がうまく連携するためには、①対等に協働すること、②学生の目的を大人が明確化すること、③活動意義を十分に伝えてもらうことの3点が重要との意見が出されました。また、双方のメリットはもとより、啓発に留まらず、学生が活動に参加しやすい環境を大学がいかに整えるかが、学生の行う活動の成否につながるのではないかと

との意見も上がりました。学生の強みは既存のルールに依らないで、提案ができることであるが、団体から活動の意義や思いを伝えてもらうことで、より良い活動につながるなどの提案もなされました。

今回のグループワークを通して発見できたことは、地域での活動に関しては、互いの共通点を見出すことは難しいが、それでも共通点を見いだすことが、大学と地域団体とのつながりを作る上で強みとなるということでした。



Aグループのディスカッション風景(写真右下が小林紀之さん)



発表する金子尚史さん

学生と地域団体がともにプラスになる連携作りを

私は、府中市生涯学習センターで毎年9月に行われる、生涯学習フェスティバルのお手伝いをしています。子どもから高齢者まで、みんなで楽しめるフェスティバルにと思い、東京農工大と明星大の学生サークルのみなさんに、「ミニホース・小動物とのふれあい体験」や「科学おもちゃ工作」のイベントに参加してもらっています。子どもたちにはとても人気で、いつも親子で大勢集まってくれます。生涯学習は高齢者の暇つぶしと思われがちですが、若い学生の参加によって、世代間の交流も広がっています。

そんな関係で今回のシンポジウム

に参加しました。地域の市民団体との協働を進めている大学の先生と学生から、活動の生の声を聞けて大変参考になりました。特に学生のいきいきとした事例発表は非常に印象に残りました。地域でのボランティアを、自分の成長のステージと位置づけて、そこから学ぶ姿勢は素晴らしいと思いました。きっかけはゼミでの指導であったり、大学のボランティアセンターや地域団体からの呼びかけであったりようですが、学生が現実社会との関わりをもつことはとても大切だと思います。一方、地域団体にとっても、活動に若い学生が参加することによって、おおいに活性化します。そのとき、齋藤先生の「思いのある人がつながる」、「学生の専門性を活かした協働」が重要というご指摘は、肝に銘じなければと思いました。単に労力の提供ではなくて、お互いにプラスになる連携をつくっていかれたらと思います。

Group B

府中市生涯学習ボランティア「悠学の会」

奥野 英城(70代)



Bグループのディスカッション風景(右から3番目が奥野英城さん)



発表する田中英俊さん

地域のボランティア活動に、多くの若者に参加してもらうには？

先日は「若者と市民団体の連携を考えるシンポジウム」にお招きいただきありがとうございました。第2部でのC班のディスカッションの内容を取りまとめてみました。

全体的にみると、「NPO法人や若者、大学などの今後について」話し合うことが多かったような気がします。それぞれの立ち位置が大きく異なるため、各方面から様々な意見や疑問などが出され、内容はとても濃く、普段聞けないことなどが聞け、とても勉強になりました。中でも熱く皆さんが討論したテーマは、「どのようにしたら、多くの若者に地域のボランティア活動に参加してもらえるのか」です。現状の問題として若者の参加率が減少傾向にあることから、上記の話題になりました。「地域のNPOの活動内容がまだ多くの人に知られていないからではないか」という意見もありましたが、「むしろ、学生が魅力的に感じる活動が少ないからではないか」というのが、大きな原因



発表する篠原道子さん

Group C

多摩大学梅澤ゼミ2年

横溝 侑哉

だと考える人が大勢を占めました。また、「活動を行っている場所が、自宅や学校から遠いこともあり、参加しづらくしているのではないのか」という意見も出されました。

今後の参加率を増やしていくためには、「大人が考えた企画のみではなく学生が考える企画に大人の方々が参加するという形にする」とか、「学生の企画を全て通すのではなく、大人の意見も加えることにより、より質の高い企画を目指す」などといった対策案が出されました。

そのほか、「自宅や学校の近くの活動でない場合は、交通費などの金銭的援助があると学生も参加しやすいのではないのか」という意見や、「学校が、ボランティア活動に参加した学生に対して単位を付与するといった仕組みを構築する」のも、一つの案ではないかと言う人もいました。しかし、「ボランティア活動は、自分のためにする活動ではなく、人のために行う活動である」のだから、この考え方には反対だという人もいました。

最後に、今回初めてNPO法人の方々や他大学の教職員の方々と交流することで、普段は聞けないお話しや、大人の皆さんの今後の展望などを聞くことができ、これからの自分自身の活動にも活

かしていきたいと感じました。貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。



Cグループのディスカッション風景
(後方中央が横溝侑哉さん)

ボランティア活動のメリットを明確に

先日行われた「若い力と市民団体の連携を考えるシンポジウム」には、様々な年代・所属・職業の方々が集まり、ボランティアについて活発な意見交換、討論が行われました。

その中で私たちのグループでは「大学の役割は地域と生徒を結ぶ架け橋である」という意見が多く出ました。地域の方の意見としては、地域活性化や地域の問題解決・発展への活動を行う際、同じような問題をテーマとする教授などにつながるが必要で、こうして初めて、大学・市民とが一体となって「まちづくり」を行うことができるという指摘がありました。課題としては「大学が受け皿として要望を受け入れ、行動までに発展するか」です。グループの中では、うまく地域と大学が連携した成功例が多く挙げられましたが、すべての大学がどこまで地域と連携し活動できるかは定かではありません。それについては地域や大学によって差が出てきます。そこに関しては大学の計画や予定もありますので、地域の要望に全て応え協力するのは難しいです。

私は、学生が地域のボランティアに参加することにより自分の輪が広がると思います。現在、就職活動やインターンという場でコミュニケーション力や大学生活で得た力などが求められるので、ボランティア経験は自分にとって大きな糧になります。しかし問題として、ボランティアを行うきっかけがないこと、ボランティアを行ってもメリットがないということです。忙しい学生にとって、正直なところボランティア活動



Dグループのディスカッション風景

Group D

明星大学教育学部教育学科1年

松崎 千里



発表する松崎千里さん

を行うに当たり、交通費の支給や単位の免除など自分へのメリットがないと、ボランティアをするきっかけがなかなかつかめません。無償のボランティア活動を行うより、アルバイトでお金を稼ぐほうに時間を割きたいというのが本音です。自分のためになるということは分かるけれど、時間や労力が足りません。ボランティア活動を行うメリットを明確にできれば、もっと参加する学生が増えると思います。

市民と大学生が対等な関係で 交わるために

武蔵野美術大学教授 齋藤 啓子

アメリカのロジャー・ハート(発達心理学者・環境心理学者)という研究者がユニセフの依頼により書いた、「子どもの参画」という本が翻訳されています。

それによると、子どもが社会的活動に参加する段階が1段から5段までの参画のはしごで表わされています。1段目が悪いということではありませんが、参加のはしごの一番いい関係は5段目で、子ども(ここでいえば大学生)と大人が対等に協力しあって一緒に決めること。やはりそこでは年齢と経験則が違っても、パートナーシップが結べれば素晴らしい結果が得られると思います。それより低い4段目は子どもが決めたことを大人が尊重し、子どもが主体的に取りかかるとなっています。参加の段階のさらに下に、非参加という3つの段階があり、「形だけの参加」「お飾り参加」「操り参加」と訳されています。中身の如何にかかわらず、例えば地域と大学が一緒にやっているという、ただPRの手段として活用されている参加のことです。そこに留まっているとなかなか上に到達できません。

コミュニケーション能力が若い人に欠けることで、その能力を高めるためにはいろいろな世代の人とのコミュニケーション経験が必要と言われますが、私はそれだけでは能力が高まらなと感じています。やはり本当のコミュニケーション能力には、自分の力を発揮し、やりたいことが実現でき、人から認められる、そういう達成感が必要になるでしょう。ただしゃべるのがうまい、要領がいいという人のことではないと思います。

心を動かされ、それが他の人の心や行動も変えさせる場、それが365日毎日ではなく、たとえ1年に一度、10年に一度の経験であったとしても、人生における貴重な出会いであるかもしれない。そういう出会いのきっかけ作りが地域にはあり、相互にメリットは必ずあるというのが、みなさんの結論でした。

しかし、大人は学生への配慮が足りない、昔との差に気がついていないという反省の弁もできました。お互いの信頼関係をつくることも重要です。

今は発達した情報機器を使って発信、受信していますが、真の信頼関係は今日のように実際に時間を共有し、共感するというきっかけがあって初めて、生まれてくるのではないのでしょうか。

各大学の中にも、市民の中にも、対等な関係で交わるような場所が増えていけばいいなと思います。今日で終わりというのではなく、これからも若い人の貴重な意見を心に留めていただければありがたいです。



進行役の齋藤啓子教授

シンポジウム参加者名簿

進行 齋藤 啓子 (武蔵野美術大学教授)

Aグループ

金子 尚史 (小平井戸の会)
大竹 桂子 (吉祥寺村立雑学大学)
小原 伯夫 (NPO法人老いじたくあんしんネット)
小林 紀之 (小平社協こだいらボランティアセンター)
鈴木 利博 (学び舎江戸東京ユネスコクラブ)
梅澤 佳子 (多摩大学教授)
松本 昌 (武蔵野美術大学大学院)

Bグループ

木本 芳樹 (小平井戸の会)
佐藤 博信 (吉祥寺村立雑学大学)
奥野 英城 (悠学の会)
佐々木 恵 (武蔵野美術大学)
田中 英俊 (とうゆう会)
浜村 (美術家集団 多摩アンデパンダン)

Cグループ

辻 京子 (小平井戸の会)
篠原 道子 (NPO法人小平こども劇場)
堤 直樹 (とうゆう会)
横溝 侑哉 (多摩大学)
西田 剛 (明星大学ボランティアセンター)
久保田 進 (学び舎江戸東京ユネスコクラブ)

Dグループ

宮崎 敬子 (北多摩自然環境連絡会 東大農場演習林の存続を願う会)
池田 葉子 (一般社団法人小平FMネットワーク)
中村 孝 (吉祥寺村立雑学大学)
関根 和美 (西多摩新聞)
松崎 千里 (明星大学)

あとがき

今回の企画を通して大学という機関が、「若者と地域とのつなぎ役」を大きく果たしていると改めて感じました。一方で、学生に手伝ってもらっているだけでなく、学生にかけがえのない出会いの場を創作しているのは地域の皆さんの存在であることも感じます。

大学職員の皆さんの苦勞と努力に感心すると共に、互いの出会いの場は未来の可能性として深く我々の心に残っています。学生、地域、つなぎ役の皆さんの「気持ちののりしろ」が少しずつ広がり、出会いの場が益々輝くことを今後も期待すると共に、その輝きを我々タウン誌会が応援できればと思います。

改めてこの機会をご提供いただいた多摩交流センター様、そしてご参加、ご協力いただいた皆様に御礼と感謝を申し上げます。

平成30年3月

東京TAMAタウン誌会 会長 柴崎 斉



若い力と市民団体の連携を考えるシンポジウム 報告書

2018年3月15日 発行

■発行

公益財団法人 東京市町村自治調査会

【(公財) 東京市町村自治調査会】

〒183-0052
東京都府中市新町 2-77-1 東京自治会館 4F
TEL042-382-0068 (総務)
FAX042-384-6057
<http://www.tama-100.or.jp>

【多摩交流センター】

〒183-0056
府中市寿町 1-5-1 府中駅北第2庁舎 6F
TEL042-335-0100
FAX042-335-0127
<http://www.tama-100.or.jp/>
e-mail:tama001@tama-100.or.jp

■企画・制作・編集

東京 TAMA タウン誌会

〈事務局〉
〒206-0033 多摩市落合 2-38-103
尚多摩ネットワークセンター内
TEL042-337-1888
FAX042-337-1885

東京 TAMA タウン誌会

【西多摩新聞】

㈱西多摩新聞社
柴崎 斉
〒197-0022 福生市本町 33
TEL042-552-3737 (代)
<http://www.nishitama-shinbun.co.jp>
e-mail:info@nishitama-shinbun.co.jp

【週刊もしもしんぶん】

尚多摩ネットワークセンター
長谷川 豊子
〒206-0033 多摩市落合 2-38-103
TEL042-337-1888 (代)
<http://mosimosi.biz>
e-mail:info@e-mosimosi.com

【ほのぼの情報ネット】

松永 和子
〒187-0001 小平市大沼町 5-18-17
TEL042-308-8888
<http://honobono-mytown.com/>
e-mail:honobono-mytown@jcom.home.ne.jp

【週刊きちじょうじ】

㈱吉祥寺情報センター
大橋 一範
〒180-0003 武蔵野市吉祥寺南町 1-4-1 井の頭ビル 7F
TEL0422-48-7741
<http://www.tokyo-net.ne.jp/>
e-mail:kichijo@tokyo-net.ne.jp

【ふちゅうファミリープラザ】

ふちゅうファミリープラザ
大沢 稔
〒183-0046 府中市西原町 3-23-3
TEL042-572-4044
<http://shop.aokai.or.jp/units/36251/family-p/>
e-mail:e-osawa-fp@jcom.home.ne.jp